

致庸が銀包を取り出すと、たちまち避難民たちが群がってくる。

「旦那様、どうかお恵みを……」

次々と伸ばされる手に、致庸がたまりかねて悲鳴をあげると、長栓が慌てて馬車を飛び降りて助けに来た。避難民の数は益々ふくれあがり、駆けつけてきた巡邏兵たちが鞭を振り上げて「散れ！ 散れ！」と大声で叫んだ。

致庸は巡邏の官兵に食ってかかった。

「この人たちを打つのはやめてください！ なんで打ったりするんですか！ 王法ってもんはないんですか！ この人たちは避難民なんですよ！」

避難民たちは痛みを堪えて散りだした。長栓はまだ銀子を配っている致庸に向かって叫んだ。「若旦那様、急いでください、これ以上遅くなったら試験に間に合いませんよ！」

その時、再び押し寄せてきた被災者たちに官兵が長鞭を振り回しだした。長栓は馬車に飛び乗り、雪礫と力を合わせて致庸を引きずり上げると、馬に鞭をくれて囲みを突破した。

横丁に入ると、致庸は空模様を見てきっぱりと、長栓に言った。

「確かにこれ以上ぐずぐずしてはいられないな。おまえは馬車をこのさきの宿屋に繋いで来い。裏通りを通って貢院に行くぞ！」

「みんなこの乞食連中のせいだ……」

長栓がつぶやくと、致庸はいきなり怒りだした。

「乞食だなんて言うな！ あの人たちはもともと善良な市民なんだぞ！」

長栓は舌を出す、急いで馬車を繋ぎに行った。

真つ暗な裏通りにぼつんとひとつだけ灯りが揺らめいていた。茂才がひとりつきりて提灯と弁当を持って前方を歩いて行く。さつき表通りでさんざん人波にもまれ、靴を片方無くすわ、提灯も破れてしまうわで、〃灯りが消えればお先真つ暗〃という縁起でもない気になり、わざわざ店に急ぎ戻って別の提灯に取り替えて来たのだ。おかげで提灯は明るくなったが、その代わり時間が遅くなってしまう。ちぐはぐの足で歩いていた茂才は、慌てるあまり街角に投げ出された避難民の脚に蹴つまづいた。「いてえ！」と相手が叫ぶと、暗闇の中に座ったり横たわったりしていた避難民たちが一斉に目を覚まし、茂才が手にした弁当に目を留めると「取っちまえ！」と叫んで押し寄せて来た。茂才は驚いて大声をあげると人々ともみあいになった。ちようどその時致庸、雪礫、長栓が行き会わせただ。長栓は弁当を致庸の手に押しつけると、急いで駆けつけて大声で叫んだ。

「手を放せ、手を放すんだ！ こんちくしょう、覚えてやがれ！」

茂才の弁当を奪い取った避難民たちがわつとばかりに散って行った。

「ちきしょう、この罰当たりめ、おれの弁当を奪うとは、喉に詰まらせて死んじまえ！」

「あんたもなあ、全くしょうがないな。あんな乞食にやられるなんて！」

長栓の台詞に茂才はカツとなった。

「おまえは何様だ？ おれに構うな！」

長栓は致庸を振り返った。

「若旦那様、とんでもないやつですよ。助けてやったのに、ありがたいと思いやしない！」

茂才はこれを鼻で嗤った。

「ちよつと待て、おれを助けたと言うが、何の助けになったというんだ？ おれの弁当はどうなった？」

長栓は腹が立つやらおかしいやら。

「あなたの弁当は乞食に盗られちまったんだろう？ あなた相当なぼんやり者だな？」

「違う！ ぼんやり者はお伺いしたいもんだな。お見受けしたところ、おたくは郷試を受けに来た秀才さんだろうか？」

「それまた間違いだ。おれが郷試を受けに来た秀才だと知っているなら、おれがわかりきった道理すらわきまえないなんて思うはずがない。なのにまだそんなことを言っているのが第一の間違いだ。そしておまえはさつきおれを助けたと言ったが、しかしおれの弁当は乞食に奪い去られてしまった。おまえがもしほんとうにおれを助けたのだとしたら、弁当はおれの手元になければならないはずだ。なのにどうしておれを助けたなんて言えるのだ？ これが第二の間違いだ」

致庸は茂才に興味を覚えた。雪瑛を後に残し、進み出て目をこらすと、相手はさきほどの茂才ではないか。茂才も致庸に気付いたが、傲然と首をそらしている。

「若旦那様、こんなやつに理屈を説いても無駄なことですよ。行きましよう！」

長栓は致庸の手を取って歩きながらぶりぶり腹を立て、それを見て茂才はますます嵩にかかった。

「また間違つた！ おれが理屈をわきまえないとわかっていながら、なぜ理屈をこねようとする？ おれに理屈を説くということは、おれが理屈をわきまえるということが前提になつているはずではないか。間違つているのはおれではなくおまえの方だ！ ぼんやりしているのはおれではなくておまえなんだ！」

致庸は長栓の手を振り払うと、二歩進み出て拱手した。

「生員さん、一度お会いしましたね！」

「そうかい？」

「フフ。貴殿にお会いした時すぐに、ただならぬ方だとわかりましたよ。きっと郷試を受けに来られた方だと思いました。お名前をお伺いしてもよろしいですか？」

「行きずりの相手だろう。名乗るまでのことはない」

茂才が傲然と言うと、致庸はまた笑つた。

「万一わたしが閣下と友だちになりたいと思つたとしたら？」

茂才は致庸が何者かわからぬふりをして皮肉に笑つて見せた。

「あなたの様子を見るに、お金持ちのお坊ちやまらしいな。乳母日傘でお育ち遊ばした深窓のご令息だろう。おれのような貧乏書生とはご縁のないお方だ。いたずらに格好をつけて、何になる？ われわれはそれぞれ自分の道を行くべきだと思つがね！」

茂才は言い捨てて大股で歩き出した。

「若旦那様、あいつどう見てもおかしいですよ。構うのはおやめなさい。さあ行きましよう！」

長栓はいきり立つが、致庸は些か納得がいかない。

「待てよ！ほんとうに上には上があるもんだ。喬致庸は今まで自分は天下一の酔狂者だと思っていたが、自分より上手に出会って自分の卑小さを思い知らされる日が来るとはな！絶対あの人と友だちになってやる！」

致庸は急いで数歩進み出ると声を張り上げた。

「お待ちください、友よ！手前は山西祁県喬家堡の生員、喬致庸と申す者です。是非とも閣下とお近づきになりたいのです。どうかご尊名をお聞かせください！」

茂才は致庸が話している間は立ち止まっていたが、話し終わると無言のまま大股で離れていった。

「若旦那様、ちゃんとご覧になりましたか？あいつは絶対におかしいですよ！ひよっとするとバカかもしれませんよ！行きましよう、試験に遅れますよ！」

長栓はカリカリしていたが、致庸は少しも気落ちせず、ニツと笑うと雪璫の手を引いて近道をとって走りだした。